

カンパニアにおける古代エジプト文化の影響

チェラミカ・インヴェトリアータからの一側面

大 城 道 則

はじめに

これまでローマ陶器についての研究は、多彩な装飾をその特徴とし、地中海全域、ヨーロッパ大陸内部、及びアフリカ大陸にまで広く分布しているテラ・シジラータ Terra Sigillata と呼ばれている赤色光沢陶器 Red-gloss Pottery に関するものに集中していた¹。しかしながら、最近その他のローマ陶器、例えばチェラミカ・ア・パレティ・ソティリ Ceramica a Pareti Sottili (薄手土器) やチェラミカ・コムーネ Ceramica Comune (日用土器) などの研究も注目を集めるようになってきている²。本論で取り上げるイタリア語でチェラミカ・インヴェトリアータ Ceramica Invetriata³ と呼ばれているローマの施釉陶器も、これまで研究テーマとして取り上げられることの少なかったものの一つである⁴。

以下、第一章において、一般的にはエジプトからの影響と考えられているチェラミカ・インヴェトリアータの定義付けを行い、そのアイデンティティーを明らかにする。第二章では、二つの環状把手部を持つチェラミカ・インヴェトリアータの特徴を出土例の分布状況から指摘する。第三章では、古代エジプト文化のイタリア半島への伝播をセラピス崇拝の痕跡から確認し、エジプト起源と考えられているチェラミカ・インヴェトリアータの伝播ルートを想定する。以上のことから、東地中海地域における文物の移動とその結果をチェラミカ・インヴェトリアータという特徴的な一資料を通じて考察する。

第一章 チェラミカ・インヴェトリアータについて

R. J. チャールズトン Charleston によると、ローマの施釉陶器の一種であるチェラミカ・インヴェトリアータの特徴は以下のようになる。(1) 金属細工器の形を模倣している。(2) 鉛釉 lead glaze が用いられ、外側が緑色系の色、そして内側が黄色系の色である。(3) 上下逆さまにして窯に入れられるため釉薬の流れ具合に特徴がみられる⁵。一方 L. カレッタ Caretta によると、その特徴は、アルカリ釉 alkaline glaze を釉薬として施されて焼成されたものであり、色には青色、緑色、そして黄色のものがあるとなっている⁶。また G. M. A. リクター Richter は、鉛釉、アルカリ釉、双方ともが青緑色の釉薬で覆われているとしている⁷。以上のように、この施釉陶器の定義は、必ずしも一定しているとは言えない。

H. ハッチャー Hatcher らによるアシュモレアン博物館とルーブル美術館所蔵のローマ時代に年代付けられる施釉陶器の研究からも、それらの外側の色は59個中54個が青緑色系及び黄色系であること⁸と、E. R. カレイ Caley によって行われたタルソス Tarsus で大量に出土したこの施釉陶器に対する化学分析結果から、鉛釉だけではなくアルカリ釉の元となる珪素 Silicon もまた検出され

たこと⁹（表1参照）から、セラミカ・インヴェトリアータとは、青緑色系及び黄色系で鉛釉及びアルカリ釉を用いたローマ時代にローマ帝国の勢力下にあった地域で製作された施釉陶器を指すと広い意味でとらえた方が適切であろう。ただし鉛酸化物の割合が高いものを自動的に鉛釉と定義するならば、タルソス出土のものは鉛釉と言える。色の違いは、焼成時における窯の中の温度と鉛あるいはアルカリ性の物質の含まれる割合によるものと考えられる。

	鉛酸化物	二酸化珪素	酸化第二銅	酸化第二鉄	酸化カルシウム	一酸化ナトリウム	合計(%)
緑釉陶器	64.4	29.7	3.2	0.8	1.0	0.9	100.0
黄釉陶器	49.6	37.9	未検出	8.5	2.8	1.2	100.0

表1：緑釉・黄釉陶器の成分分析（E. R. Caley, "Results of a Chemical Examination of Some Specimens of Roman Glaze from Tarsus", *AJA* 51 (1947), p. 391-table を参考として作成）

これらの施釉陶器は、イタリア半島だけでなく、シリア、キリキア、エジプト、南アラビア、キプロス、南ロシア、フランス、ハンガリー、イギリスなどで出土している¹⁰。エジプシャン・ファイアンス Egyptian Faienceのようにポピュラーではないため、基礎研究が少なく¹¹産地でさえもまだ完全に確定されているとは言えないが、国立ナポリ考古学博物館 The National Archaeological Museum of Naples 所蔵の浮彫動物文様杯（図1）と同じものがエジプトのメンフィスで出土していることから¹²、少なくともそのうちの一つはメンフィスにあったと考えられている¹³。メンフィスは、プトレマイオス朝時代からローマ時代にかけてエジプシャン・ファイアンス、あるいは青釉や緑釉陶器の産地として知られていたことから¹⁴、おそらくこの主張は的を射ているであろう。

リクターによると、エジプトの青釉陶器の影響は、人頭型や動物型をしたアリュバロス aryballos¹⁵にしばしば見られる¹⁶。またエジプシャン・ファイアンス及びエジプトの施釉陶器には、セラミカ・インヴェトリアータにも用いられていたアルカリ釉が使用されていた¹⁷。カレッタはキリキアのタルソスとエジプトのアレクサンドリアにも生産地があったと述べている¹⁸。クレオパトラ7世の治世、キリキアは、プトレマイオス朝の支配下にあったことから、エジプトから製法が伝わった可能性が十分考えられる。またシリアのアレッポにも生産地があったと考えられている¹⁹。

ポンペイでは、この種の施釉陶器がかなりの数発見され、国立ナポリ考古学博物館で展示されている。装飾が施されたカンタロス杯やスキフォス杯、そしてランプなどがこの施釉陶器で作られた²⁰。またポンペイからは、特に古代エジプトの神であったブタ八神、ベス神、そしてソベク神であろうと思われるワニ、カエルなどがセラミカ・インヴェトリアータと同様に施釉の施されたテラコッタ・インヴェトリアータ Terracotta Invetriata として作られた²¹。イタリアでは、アウグストゥス期にアレクサンドリアからガラス職人がカンパニア地方のクマエ Cumae に移住してきたと考えられているため²²、セラミカ・インヴェトリアータの製作法もその時に持ち込まれた可能性がある。このことは小アジアで出土したセラミカ・インヴェトリアータと同じ物と考えられる環状把手部分を持つ施釉陶器の年代のほとんどがアウグストゥス期に集中しているという F. F. ジョーンズ Jones による指摘²³と、アウグストゥス期にはセラミカ・インヴェトリアータの装飾文様に良く用いられた植物文様など自然からとられたモチーフが特に好んで用いられ

たというリクターによる指摘²⁴などにより補足される。

国立ナポリ考古学博物館所蔵の浮彫動物文様杯（図1）と同型のもので古代エジプトの神々を模したものは、明らかにエジプトの影響と言えるが、それ以外のものはどうであろうか。国立ナポリ考古学博物館に所蔵されているセラミカ・インヴェトリアータ製の二つのカンタロス杯（図2）を例に考えてみよう²⁵。筆者の知る限りにおいて、少なくともこれらのカンタロス杯とメンフィスで出土した施釉陶器群の間に器形の類似性は見られず、むしろこれらのセラミカ・インヴェトリアータ製のカンタロス杯は、その環状把手部分の類似性から、ポンペイのメナンドロスの家から出土した銀製のスキフォス杯（図3）²⁶や、ポンペイ近郊のウィラであるボスコレアーレBoscogaleaのセッテ・テルミニの別荘から出土した銀器などを模倣したものと考えられる²⁷。これらのいわゆる「ボスコレアーレの遺宝」Boscogalea Treasureもまた、アウグストゥス期のものと考えられている。

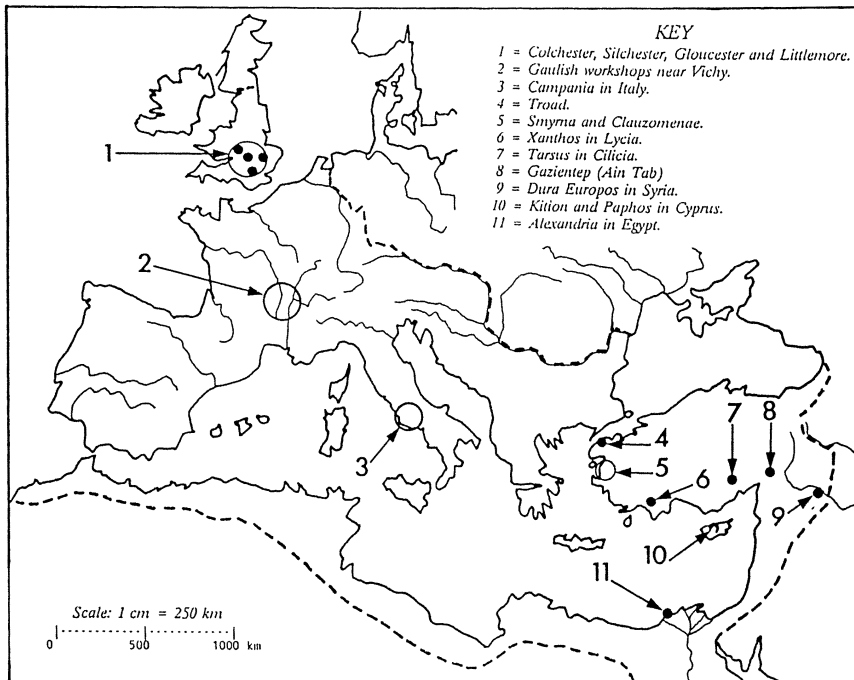
チャールズトン²⁸は、装飾と二つの環状把手部を持つ容器が明かに、同様の環状把手部を持つ銀の打ち出し細工repousséに由来すると指摘している²⁸。ジョーンズ、カレッタ、そしてJ. W. ヘイズHayesらもまた、このセラミカ・インヴェトリアータの把手部分に注目し、銀器からの影響を提案している²⁹。セラミカ・インヴェトリアータのオリジナルが金属器であったという説は、M. ロストフツェフRostovtzeffによってもなされている³⁰。少なくとも、カンパニアから出土するセラミカ・インヴェトリアータについては、銀器の影響が確かに見られる。

第二章 二つの環状把手部を持つ杯

第一章で紹介したポンペイ出土の二つのカンタロス杯（図2）は、エジプトの影響を受けたものだと考えられている。側面には植物文様がめぐらされている。この植物文様は古代エジプトの容器などにしばしば見られる文様である³¹。把手部分は別々に取り付けられ、全体に釉薬が施されており、外側は深い黄色、そして内側は、一方は黄色、もう一方は青緑色である。口縁部に見られる釉薬の溜まり具合から、逆さまにして焼成されたものと思われる。まさに第一章で述べたチャールズトンによるセラミカ・インヴェトリアータの定義に完全に当てはまると言える。これらのカンタロス杯以外にも、ポンペイ出土のスキフォス杯が数例（国立ナポリ考古学博物館登録番号22578と22576など）知られている。それらの側面にも植物文様がなされている。

第一章で述べたように、セラミカ・インヴェトリアータの出土例は、広範囲に渡り、イタリア半島だけでなく、東は南ロシアの黒海北岸に位置するオルビアOlbiaから、西はイギリスの科尔チェスター Colchesterにまでわたっている。スキフォス杯あるいはカンタロス杯の形状をした二つの環状把手部を持つこの器形は、この種の施釉陶器にしばしば見られるものである。地図1はセラミカ・インヴェトリアータの出土例の分布状況を示したものである。

この地図から判断すれば、セラミカ・インヴェトリアータは、東地中海地域で特に出土していることがわかる。そして同時に、ハッチャーらの統計学的研究成果により、セラミカ・インヴェトリアータの大量出土が確認されているイギリスの科尔チェスターからは、二つの環状把手部を持つものは一つも出土していないことがわかるのである³²。また東地中海沿岸地域では、二つの環状把手部を持つセラミカ・インヴェトリアータの出土例が数多く知られている。これらのことは二つの環状把手部を持つセラミカ・インヴェトリアータの杯が東地中海沿岸で特に好



地図 1 : 紀元 1 世紀におけるセラミカ・インヴェトリアータの出土地 H. Hatcher, A. Kaczmarczyk, A. Scherer and R. P. Symonds, "Chemical Classification and Provenance of Some Roman Glazed Ceramics", *AJA* 98 (1994), p.439 - fig.1)

まれたのものであったということの意味するであろう。また、把手部上に付く蹴爪形の小さな平版 Knobbly handle-plates³³はないが、ヘイズによれば、一般的に類似の器形が紀元前 3 世紀初頭のアレクサンドリアで見られるため、アレクサンドリアの職人集団によって影響を受けたものと考えられている³⁴。

しかしながら、第一章で述べたように、この施釉陶器の器形がウェスウィウス山麓にあるウィラで出土する銀器を模倣したものであるとするならば、また東地中海にその出土例が集中していることから考えれば、アレクサンドリアとの関係のみならず、ローマ世界と東地中海地域との密接な関係が想定されるべきである。実際アウグストゥス期およびそれ以降のローマによる東方属州政策は、対パルティアを核として重要視されていたため、ローマの文化が東地中海地域に流入し易い状況を作り出していた。東地中海地域の属州には、様々なローマの文物が流入したであろう。そして、その中にセラミカ・インヴェトリアータのデザインの元となった銀器も含まれていたと思われる。しかしながら、一方で東地中海地域からローマへと文物が流入したという可能性にも留意すべきである。

我々がこの二つの環状把手部を持つ施釉陶器について考える際、考慮に入れなければならないものの一つに東地中海地域、特に小アジアやシリアで出土する施釉陶器がある。これらの施釉陶器にもスキフォス杯型で二つの環状把手部を持っていることをその特徴の一つとしているものが知られているのである(図 4)³⁵。両者間の明らかな違いは外面に施されたその文様にある。こ

れまで述べてきたイタリアで出土するセラミカ・インヴェトリアータの文様のほとんどが植物文様（図5）であるのに対し、小アジアやシリアで出土するものには、人物や動物が描かれていることが多い。しかも描かれる対象は、いつでも動きがあるのである。例えばギリシア神話のモチーフ³⁶、飛天や、馬上から弓を射る人物（図6）³⁷などが描かれているのである。またさらに注目すべきものが、シリア砂漠の隊商都市パルミラに見られる。パルミラの地下墓から主に出土する石棺上の彫像や納体室の前面に置かれる彫像には、二つの環状把手部を持つ容器を手に持つ人物がしばしば彫られているのである（図7）³⁸。色が施されていないため器形以外は明らかでないが、ローマの影響下にパルミラがあったことを考慮すれば、この容器がセラミカ・インヴェトリアータあるいはその原型の銀器である可能性も考えられる³⁹。

第三章 セラピス崇拜とセラミカ・インヴェトリアータの伝播

ローマ時代にエジプト文化の影響は、様々な形でイタリア半島へもたらされた。セラピス Serapis 崇拜もそれらのうちの一つである。セラピス神は、エジプト在住のギリシア人たちを政治的に一つにまとめるために紀元前3世紀頃創り出された全く新しい神であった⁴⁰。それは古代エジプトの神オシリスと聖牛アピスの属性を備えていた⁴¹。アレクサンドリアを中心として崇拜され、最終的に地中海全域へとその信仰は拡大した。カンパニア地方には、紀元前2世紀の終わり頃にはたどり着き、エジプト神信仰に対する度重なる弾圧にもかかわらず、後にローマ帝国全土で広く崇拜されるまでになる⁴²。

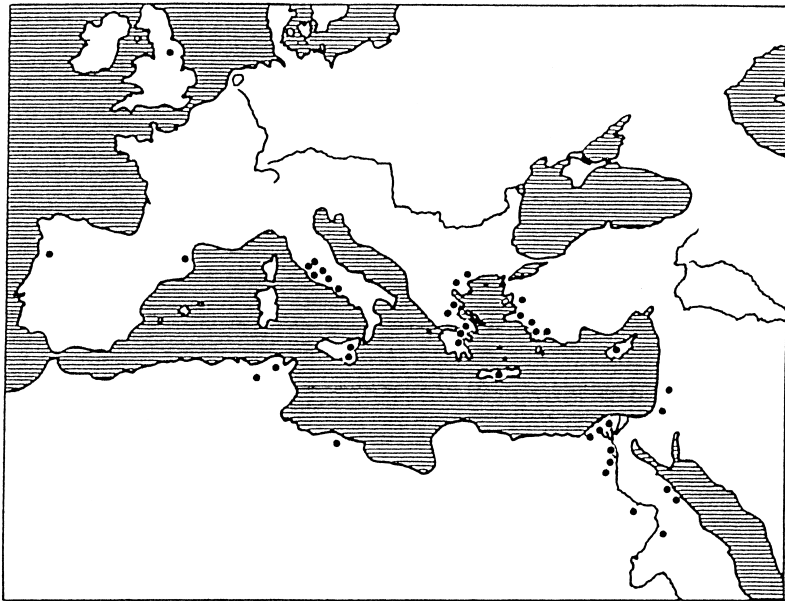
セラピス神は、古代エジプトの神オシリスだけでなく、ヘレニズム世界の様々な神々の属性を持っていた。例えばセラピス神は、ディオニソス、アムン、ヘリオス、ハデス、そしてアスクレピオスなどの特徴を兼ね備えた混合神であった⁴³。紀元前1世紀後半にシクロスのディオドロスは、著書の中で、セラピス神について以下のように紹介している。

「ある人々は、オシリス神がセラピス神であると主張する。またある人々は、セラピス神はディオニソス、プルート、アムン、あるいはユピテルだと言う。パンと呼ぶ人々もいる。そして幾人かはセラピス神が、ギリシア人たちの間でプルートと呼ばれている神であるという」

(DIODORUS, , 25)

このような記述からもわかるように、セラピス神は地中海地域に暮らす人々の生活の中に深く浸透していたことがわかる。その浸透は東地中海地域、特に小アジアに点在するセラピス神殿の分布により明らかである（地図2参照）。

またセラミカ・インヴェトリアータが大量に出土しているタルソスは、セラミカ・インヴェトリアータの生産地の一つであったという指摘が以前からなされており、また、タルソス出土の遺物に使用された粘土がイタリアのものと同様に似ているという指摘がなされていることから⁴⁴、セラピス崇拜の広がりやセラミカ・インヴェトリアータの伝播とを考える上で注目すべき地点であろうと思われる⁴⁵。1934年にH. ゴールドマン Goldman によって行われたタルソスのゲズリュ・クル Gzyl Kule における発掘調査の際にセラピス神を模したテラコッタ製彫像とスキフォス杯と思われるセラミカ・インヴェトリアータの断片が共に出土していることから両遺物間



地図 2 : セラピス神殿の分布 (G. J. F. Kater-Sibbes, *Preliminary Catalogue of Sarapis Monuments* (Leiden, 1973) より作図)

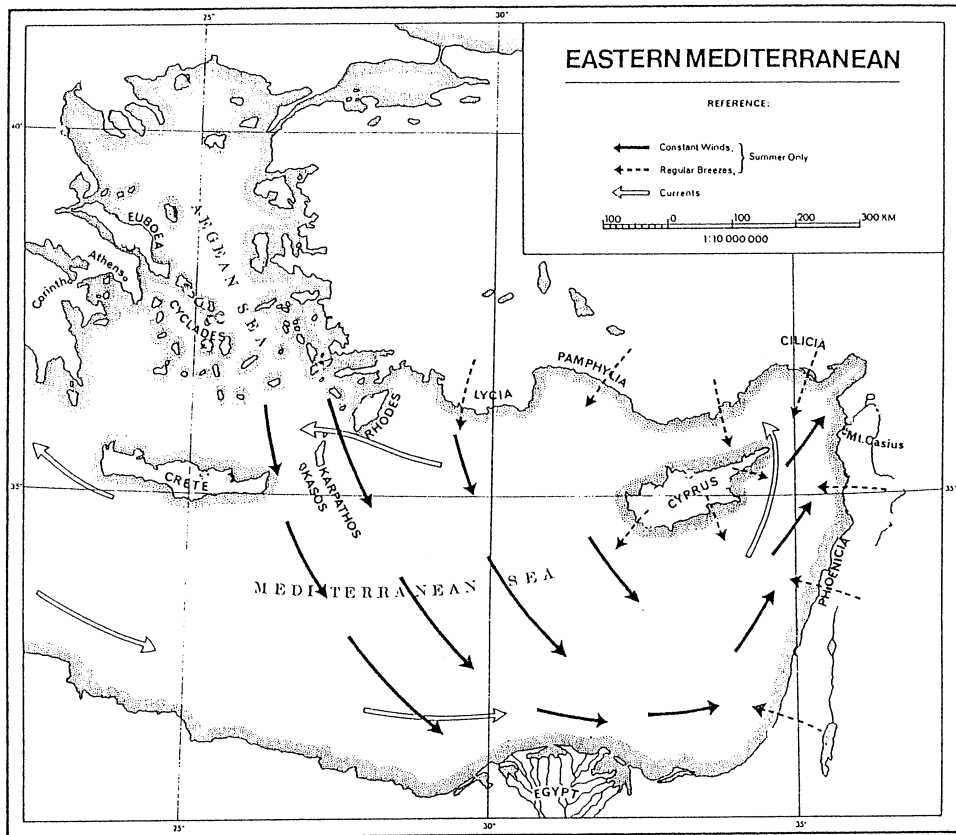
の時代的、地域的關係が強調されるべきであろう⁴⁶。

地図 1 と地図 2 とを比較した時、我々はセラミカ・インヴェトリアータの出土地とセラピス神殿の存在する場所との重複と偏りとに気付く。つまり東地中海地域、特に小アジアにおける集中という現象である。この地理的偏りを最も素直に解釈するならば、エジプトからイタリアへの文物の移動には東地中海ルートが用いられていたということであろう。K. グリーン Greene は、プリニウスとルキアノスの記述をもとに、季節風や海流などの自然現象に大きく左右される東地中海ルートの存在を以下のように示唆している⁴⁷。

「穀物の輸送船団は、ローマ市へ運ぶエジプトの新しい穀物を積み込むためプテオリからアレクサンドリアまで航海を行ったが、これには九日間を要した。ところが帰路は、一、二箇月もかかっている。これは、この地域でしばしば起こる風がエジプトに向かって吹いており、貨物を積んだ船はキプロス島へと北向きに間切りを行い、それからトルコとギリシアの海岸線を西に向かって間切る必要があったからだ」⁴⁸。

またエーゲ海では、5月から10月までエテジアン vents Etesians と呼ばれる北風が北から南に向かって吹くことも考慮されるべきであろう⁴⁹。その上、海流は、キプロス島を中心として反時計回りに流れていたのである⁵⁰。このような東地中海特有の自然環境がエジプト文化を東地中海経由でイタリアへともたらした原因の一つであるのかもしれない (第 3 地図参照) 。

もう一つの理由として、以上のような自然環境を利用した沿岸航行が考えられる。F. ブローデル Braudel によると16世紀においてさえ地中海における航海とは、沿岸を進むことを意味し



地図3：東地中海特有の自然環境 (P. J. Riis, *Sukas I: The North-East Sanctuary and the First Settling of Greeks in Syria and Palestine* (Kobenhavn, 1970), p.165 - fig.58)

ていた⁵¹。古代エジプト文化の影響は、東地中海沿岸の港湾都市から、さらに次の停泊地である港湾都市へもたらされ、イタリア半島にまでたどり着いたのである。

おわりに

エジプトからファイانس製作の手法を元にした施釉技法が東地中海沿岸を通り、イタリア半島へと伝わり、古代エジプトの神々の彫像に対してはテラコッタ・インヴェトリアータとして、そして容器やランプなどにはセラミカ・インヴェトリアータとして用いられ発展したのである。これまで述べてきたように施釉技法については、エジプトの影響が見られるのは確かである。しかしながら、本論第二章で考察したような環状把手部分を持つ容器などについては東地中海沿岸の都市からの出土例が数多く知られていることから、その器形の起源については、エジプトとは必ずしも言えないであろう。セラミカ・インヴェトリアータ製の二つの環状把手部を持つスキフォス杯は、アウグストゥス期に製作法をエジプトのメンフィスから、あるいはタルソスやアレッポなどの東地中海都市から、そして器形については、これまで考えられていたようなウェスウィオ山麓のウィラというよりも、むしろタルソスなどの小アジア地域からとって作られた

複数地域間の文化接触の賜であると言えよう。E. S. グルーエン Gruen による「ローマにおいて彫像などに見られる古代エジプト美術の影響は、共和制末期にのみ現れる」という指摘もまた紀元前後におけるエジプトとローマとの文化接触の目に見える痕跡であろう⁵²。

古代エジプトの神々を模したものと、二つの環状把手部を持つスキフォス杯あるいはカンタロス杯とは、同じ施釉の中でも一括りにせず、区別して扱われるべきかもしれない。前者は当然エジプトとのつながりを、そして後者はその独特の器形のため小アジアやシリアとの関係を重視すべきであろう。セラミカ・インヴェトリアータは、セラピス神崇拜と同様にローマ帝国の広範囲な情報・流通網の中に組み込まれて行ったのである。我々はこの施釉陶器の分布により、その情報・流通網を目で追うことが可能となる。

(付記) 本論作成にあたり、貴重な文献を提供していただいた古代学研究所助教授坂井聰先生及び関西大学の比佐篤、森大樹両氏には文末ながら記してお礼申し上げます。

註

¹ S. Elaigne, "Alexandrie. - Etude preliminaire d'un contexte ceramique du Haut", in J. -Y. Empereur (ed.), *alexandrina* (Cairo, 1998), pp.75 - 114.

² G. Ghini, "Ceramica a Pareti Sottili", in *Ceramica Romana - guida allo studio* (Roma, 1995), pp.99 - 157.

³ 直訳すると施釉陶器となるが、エジプシャン・ファイアンスと混同して用いられている場合もある。A. Lucas, *Ancient Egyptian Materials and Industries* (4ed.)(London, 1989) pp.166 - 167. ロストフツェフもファイアンスという用語を当てている。M. Rostovzeff, "The Parthian Shot", *AJA* 47 (1943), pp.174 - 187. セラミカ・インヴェトリアータという用語は、特にローマ時代に限り用いられるものではないが、テラ・シジラータがそのままイタリア語で用いられるように、本論ではそのままセラミカ・インヴェトリアータというイタリア語を用いる。もちろん本論で用いられるセラミカ・インヴェトリアータは、ローマ時代のものである。

⁴ セラミカ・インヴェトリアータに関する研究は、これまでに C. Maccabruni, "Ceramica invetriata di et a romana nel Pavese", in *Bollettino della Societa' Pavese di Storia Patria* (1974 - 75), pp.61 - 76; id., "Ceramica invetriata nelle necropoli romane del Canton Ticino", in *Quaderni Ticinesi di Numismatica e Antichita' Classiche* (1981), pp.55 - 105; A. Hochuli-Gysel, *Kleinasiatische glasierte Reliefkeramik und ihre oberitalischen Nachahmungen* (Bern, 1977) が代表として知られるが、出土例の少なさもあって十分な研究がなされていないとは言えない。最近の研究としては、L. Caretta, "Ceramica Invetriata", in *Ceramica Romana - guida allo studio* (Roma, 1995), pp.175 - 182がある。また日本人による研究としては、2000年6月25日に奈良大学で開催された第5回日本西アジア考古学学会における関広尚世氏の口頭発表「ローマ時代地中海域のスキフォス・カンタロス形鉛釉陶器」が挙げられる。

⁵ R. J. Charleston, "Roman Pottery", in R. M. Cook and Charleston, *Masterpieces of Western Ceramic Art* vol. , *Greek and Roman Pottery* (Tokyo, 1979), p.34; H. Hatcher, A. Kaczmarczyk, A. Scherer and R.

P. Symonds, "Chemical Classification and Provenance of Some Roman Glazed Ceramics", *AJA* 98(1994), p.438.

⁶ Caretta, *op.cit.*, pp.176 – 177 . カレッタは、鉛釉とアルカリ釉の両方が施釉に使用されたとしており、前者を中世の時期のもの、後者をヘレニズム期およびローマ時代のものであると考えている。

⁷ G. M. A. Richter, *A Handbook of Greek Art*(London, 1959), pp.357, 375.

⁸ Hatcher, Kaczmarczyk, Scherer and Symonds, *op.cit.*, pp.431 – 456 . イギリスのコルチェスター出土の一括資料も掲載されているが、地理的に遠いことと資料が一ヶ所に集中することを避けるため今回は割愛する。

⁹ E. R. Caley, "Results of a Chemical Examination of Some Specimens of Roman Glaze from Tarsus", *AJA* 51(1947), pp.389 – 393.

¹⁰ Richter, "Two Roman Glazed Amphorae", *BMMA* 33(1938), p.242; F. F. Jones, "Rhosica Vasa", *AJA* 49(1945), pp.48 – 50; Hatcher, Kaczmarczyk, Scherer and Symonds, *op.cit.*, pp.438 – 439; K. Parlasca, "Roman Art in Syria", in H. Weiss(ed.), *Ebla to Damascus Art and Archaeology of Ancient Syria* (Washington, 1985), pp.388, 424 – no.226.

¹¹ H. E. Wulff, H. S. Wulff and L. Koch, "Egyptian Faience A Possible Survival in Iran", *Archaeology* 21(1968), pp.98 – 107; J. V. Noble, "The Technique of Egyptian Faience", *AJA* 73(1969), pp.435 – 439; C. Kiefer and A. Allibert, "Pharaonic Blue Ceramics The Process of Self-Glazing", *Archaeology* 24(1971), pp.107 – 117.

¹² Charleston, *op.cit.*, p.35, fig.86.

¹³ S. De Caro, *The National Archaeological Museum of Naples*(Napoli, 1996), p.239.

¹⁴ W. M. F. Petrie, *Memphis* (London, 1909), pp.14 – 15, pls. L – L; ビートリによって窯跡が発見されている。Lucas, *op.cit.*, p.160.

¹⁵ アリュバロスは香油入れのこと。

¹⁶ Richter, (1959) *op.cit.*, p.302.

¹⁷ *Ibid.*, p.357; Lucas, *op.cit.*, pp.157, 160.

¹⁸ H. Goldman, "Preliminary Expedition to Cilicia, 1934, and Excavations at Göl, Kule, Tarsus, 1935", *AJA* 39(1935), p.531, fig.9; id., "Two Terracotta Figurines from Tarsus", *AJA* 47(1943), p.34; Caley, *op.cit.*, pp.389-393; Caretta, *op.cit.*, p.176.

¹⁹ Richter, "Hellenistic and Roman Glazed Wares", *BMMA* 11(1916), p.65.

²⁰ De Caro, *op.cit.*, pp.239, 254.

²¹ 施釉の施されたこの種の古代エジプトの神々をモチーフとした像は、国立ナポリ考古学博物館においてテラコッタ・インヴェトリアータとして明記され展示されている。

²² 丸山次雄 『ガラス古代史ノート』、雄山閣、1973年、197頁。

²³ Jones, *op.cit.*, p.51.

²⁴ Richter(1916) *op.cit.*, p.66.

²⁵ De Caro, *op.cit.*, p.239.

²⁶ *Ibid.*, p.230.

²⁷ ボスコレアーレからは同型の施釉陶器の杯が出土している。Richter(1916) *op.cit.*, p.65 – fig.7; J. J.

Pollitt, "Rome: The Republic and Early Empire", in J. Boardman (ed.), *The Oxford History of Classical Art* (Oxford, 1993), p.274 – fig.269. スタビアからもエジプトのモチーフがラピスラズリやサングなど
で象嵌された同型の黒曜石製の杯が出土している。De Caro, *op.cit.*, p.234.

²⁸Charleston, *op.cit.*, p.34.

²⁹Jones, *op.cit.*, pp.46-47; Caretta, *op.cit.*, pp.177, 180-181, Tavola I – 1, 2; J. W. Hayes, *Roman Pottery in the Royal Ontario Museum – A Catalogue* (Toronto, 1976), pp.28, 103 – pl.18 – 135.

³⁰Rostovtzeff, *op.cit.*, pp.174 – 176. ロストフツェフは、その起源をタルソスと考え、そこから東西へと
伝播したと考えているが、同時に金属器をそのオリジナルと考えている以上、ウェスウィウス山麓の
都市 Vesuvian Cities から出土する銀器の方をその起源と考えていたとみる方が妥当であろう。

³¹De Caro, *op.cit.*, p.239.

³²Hatcher, Kaczmarczyk, Scherer and Symonds, *op.cit.*, pp.436 – 438, table3 and 4.

³³同様の把手部全体を蹴爪形把手部 Spurred handles と呼ぶこともある。Hayes, *Handbook of Mediterranean Roman Pottery* (London, 1997), p.66.

³⁴Hayes, *Greek and Italian Black-Glass Wares and Related Wares in the Royal Ontario Museum* (Toronto, 1984), p.158 – fig.259.

³⁵Parlasca, *op.cit.*, pp.388, 424, cat. No.226.

³⁶Richter, (1916) *op.cit.*, p.65.

³⁷Rostovtzeff, *op.cit.*, pl. – .

³⁸H. Ingholt, *Studier over Palmyrensk Skulptur* (Kobenhavn, 1928), pl. – 1.

³⁹もう一つの可能性として黒海北部のクラスノダール地方で出土するガラス製のカンタロス杯が挙げられ
る。江上波夫、加藤九祚監修『南口シア騎馬民族の遺宝展 – ヘレニズム文明との出会い』、朝日新
聞社、1991年、79頁 – 66、92頁 – 90、91。またパルミラにはエジプトからの影響も存在していた。拙
稿「パルミラにおける古代エジプト文化の影響 – ベス神のアミュレットからの一考察」、『富澤壺岸
先生古希記念関大西洋史論集』、富澤壺岸先生古希記念会、1996年、127 – 146頁。

⁴⁰この説については、批判もなされている。詳しくは以下の文献を参照。大戸千之「ヘレニズム時代に
おける文化の伝播と受容 – 地中海東部諸地域におけるエジプト神信仰について」、『歴史学研究会編
『古代地中海世界の統一と変容』、青木書店、2000年、99 – 101頁。

⁴¹古代エジプトの神オシリスとアピスが結合して誕生したオソラピスがその起源である。

⁴²S. A. Takács, *Isis and Sarapis in the Roman World* (Leiden, 1995), pp.56 – 57.

⁴³G. Hart, *A Dictionary of Egyptian God and Goddesses* (London, 1986), p.190; L. K. Kosy, "Egypt in
Ancient Greek and Roman Thought", in J. M. Sasson (ed.), *Civilizations of the Ancient Near East*,
vol.1 (New York, 1995), p.8.

⁴⁴Hatcher, Kaczmarczyk, Scherer and Symonds, *op.cit.*, p.443.

⁴⁵Caretta, *op.cit.*, p.176.

⁴⁶Goldman, (1935) *op.cit.*, pp.532 – fig.6 and 533 – fig.9.

⁴⁷K. Greene, *The Archaeology of the Roman Economy* (Berkeley, 1986), p.28. (ケヴィン・グリーン著、
本村凌二監修、池口守、井上秀太郎訳『ローマ経済の考古学』、平凡社、1999年) H. Rackham, *Pliny, Natural History* vol. (London, 1950), p.423 (19, 3-4); K. Kilburn, *Lucian*, (London, 1959), pp.439

- 441.

⁴⁸Greene, *op.cit.*, p.28.

⁴⁹フェルナン・ブローデル著、浜名優美訳『地中海 環境の役割』、藤原書店、1991年、430 - 431頁。

⁵⁰P. J. Riis, *Sukas I The North-East Sanctuary and the First Settling of Greeks in Syria and Palestine*(Kobenhavn, 1970), pp.163 - 165.

⁵¹フェルナン・ブローデル、前掲書、164、466頁。

⁵²E. S. Gruen, *Culture and National Identity in Republican Rome*(New York, 1992) pp.158 - 159.



図 1 : 浮彫動物文様杯 (R. J. Charleston, "Roman Pottery", in R. M. Cook and Charleston, *Masterpieces of Western Ceramic Art* vol. , *Greek and Roman Pottery* (Tokyo, 1979), p.35, fig - 86)



図 2 : チェラミカ・インヴェトリアータ製のカンタロス杯 (S. De Caro, *The National Archaeological Museum of Naples* (Napoli, 1996), p.239)



図3：ポンペイ出土の銀製スキフォス杯（De Caro, *op.cit.*, p.230）



図4：二つの環状把手部を持つパルティアの施釉陶器（K. Parlasca, "Roman Art in Syria", in H. Weiss (ed.), *Ebla to Damascus Art and Archaeology of Ancient Syria* (Washington, 1985), pp.388, 424, cat. No.226）



図5：植物文様を持つスキフォス杯（C. Maccabruni, "Ceramica Invetriata di et a romana nel Pavese", in *Bollettino della Societ a Pavese di storia Patria* - (1974-75), p.62 - fig.1)



図6：馬上から弓を射る人物が描かれたパルティアの施釉陶器（M. Rostovzeff, "The Parthian Shot", *AJA* 47(1943), pl.)



図7：パルミラの彫像に彫られた杯（H. Ingholt, *Studier over Palmyrensk Skulptur* (Kobenhavn, 1928), pl. 1)